

ポスト冷戦世界の構造と動態

涌井秀行 著 [八潮社, 2013年]

増田壽男 | 法政大学・名誉

本書の構成を示せば次のようである。

- 序 章 二つのグローバリゼーションと二つの世紀末資本主義
- 第1章 アメリカ冷戦体制の構築
- 第2章 冷戦体制の揺らぎ
- 第3章 冷戦構造の溶解＝冷戦体制の解除とアメリカ一國覇権主義
- 第4章 冷戦体制の解体・解除とアメリカ製造業の空洞化
- 第5章 アメリカ一國生き残り覇権主義としての世界軍事＝石油支配
- 第6章 アメリカ覇権主義と一國生き残りとしての金融収奪劇
- 第7章 2009年世界恐慌と金融横奪戦略の破綻
- 第8章 ポスト冷戦と日本資本主義の戦後段階
- 第9章 アジアの「工場化」の歴史的意味と人類の未来

以下主要点を紹介しよう。第1章では米ソ冷戦体制のもとでアメリカは通貨金融面ではIMF＝ドル体制を、生産技術面では原子力・電子・航空・ミサイル・人工衛星などの新鋭軍事産業＝超独占体体制を作り上げ、アメリカ本国をコアにして多国籍企業の形態をとってヨーロッパへ、そして加工モノカルチャーの形をとって日本へと展開した。日本とヨーロッパ諸国はこの多国籍企業がアメリカの政治＝軍事戦略と結合していたため、政治的＝軍事的にも従属することになった。

第2章ではアメリカの国際収支の赤字がドルを不安定化し、1971年のニクソンショックによって金とドルの交換がなくなりインフレが高進し、スタグフレーションに突入した。これに対しイギリスではサッチャー、アメリカではレーガンの新保守主義が台頭する。

第3章では1991年のソビエト連邦の崩壊が軍事優先・行政・指令的経済が消費を置き去りにし、国民の低消費を前提にした経済構造、東欧の衛星諸国やエジプト、アフガニスタンなど途上国への経済・軍事援助、ベトナム戦争やアフガニスタン戦争への出費などが招いたものであることを述べる。また中国がアメリカの冷戦

体制に組み込まれてゆく中で「改革・開放」政策が国是となり、外資に先導される経済成長を遂げる。こうした「社会主義」から資本主義への回帰は、国・公有のもとでの生産力・生産性上昇の難しさを認識させたとする。そして20世紀社会主義が破綻したのは第一にソ連型の計画経済が消費のための計画でなく、生産のための計画であったこと、第二には、在来重化学工業段階においては、上からの指令・命令が効率を発揮したが、1970年代以降生産様式に根本的変化が起きた。「ME＝情報革命」により製造工程、製品もデジタル化され、民需品の生産が質量ともに飛躍的に増大したことによると指摘している。第三は国家が工場や農場を所有すれば、全人民のものになるとしたが実際は生産財を所有する特権層ノーメンクラトゥーラが生み出された。20世紀社会主義の崩壊は、「労働」の問題をつかめなかったからだとする。資本主義社会の失業の恐怖と報酬に代えて、社会主義では協同的自主管理システム、報酬主義を超えたシステムで生産力水準の不断の発展を成し遂げなければならない。

第4章では1995年のG7の為替相場の「秩序ある反転」を経て8月15日、日米独の為替協調介入によってマルク円安・ドル高を目指す「逆ブラザ」によってアメリカへの資本還流を打ち出す。ウィンドウズ95によってインターネットブームに火が付き、「ニューエコノミー」となった。アメリカ資本・企業は国際的戦略提携、アウトソーシング、ファブレスなど直接的な製造・生産工程を持たずに、間接的な事務、流通部門、製品開発部門の「情報ネットワーク化」を進めた。

第5章ではアメリカのポスト冷戦期の新戦略、金融横奪と軍事＝石油支配のうち石油支配を論じ、6、7章で金融横奪を論じている。湾岸戦争はアメリカが多数の小国を加えた大軍を結成し、ソ連崩壊後の世界における唯一の超大国の地位を証明したものであった。またカスピ海に近接したカザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、アゼルバイジャンなどの中央アジア地域に眠っている膨大な石油、天然ガスを獲得するためパイプラインの建設競争に参加している。

第6、7章ではアメリカ生き残りの最後の手段としての

金融収奪について論じている。第一幕は欧州の92、93年の金融危機でその主役はジョージ・ソロスのクオンタム・ファンドであった。これによってイギリスとイタリアは欧州通貨制度から離脱を余儀なくされ、翌年にはドイツ・マルクとオランダ・ギルダーを除く介入変動幅は上下15%に拡大された。第二幕はアジアの通貨危機である。震源地のタイについて述べる。タイは91年4月、外国為替管理の自由化、92年1月、商業銀行の預金金利の完全自由化、93年にはバンコック・オフショア市場が開設された。タイの資本自由化である。このバンコック・オフショア市場では海外からの短期資本の国内貸付けが認められていたため、膨大な資本がタイ国内に流入し、過剰流動性状態が醸成された。97年1月、タイ・パーツに対し、ヘッジファンドによる空売りが仕掛けられ、いったんは中断したが、タイ中央銀行がパーツを買い支えるドル準備を使い果たしたとこで再びアタックされタイ・パーツは一挙に下落した。このタイの通貨危機はインドネシア、マレーシア、香港、韓国へと伝播した。このアジアの金融危機は、アメリカが金融力によってアメリカの覇権の維持・強化をもちろんだこと、しかもこの投機がインターネット上の為替取引である点が特徴的である。

アメリカでは1980年代半ば以降、新自由主義による規制緩和＝金融自由化とコンピュータ利用による金融技術の発展で、資金の運用・調達的方式が大きく変化し、住宅ローンの証券化、自動車ローンやクレジットカード等の債権の証券化が生み出された。この過程で金融的収益を求めて実物・実体と切り離された証券が無制限に膨れ上がった。これがデリバティブ(金融派生商品)である。そしてこれが世界中に販売されたのである。この中に不良債権、所得の低い信用力に乏しい人向けのサブプライム組成金融商品が、とりわけハイリターンを謡ったヘッジファンドの金融商品に多く混じっていたのである。サブプライム関連の金融商品の価格下落、不良債権化に始まる金融恐慌はヨーロッパの金融機関に大きな打撃を与え、ニューエコノミーのアメリカに依存していた日本、ドイツをも世界恐慌に巻き込むこととなった。これは国際収支のバランスをなんとかやりくりしようとしたアメリカの金融的対処の破綻である。

第8章では日本資本主義が分析される。戦後日本は1955年から80年の25年間に8倍の成長を達成する。アメリカ、西ドイツ、フランスの2.5倍、イギリスの1.6倍と比較しても異常な急成長である。これは戦後日本資本主義が欧米と異なるストラクチャーとメカニズムを持っていたからであるとする。それは冷戦体制の政治＝軍

事＝経済的必要からアメリカによって導入・移植された工業生産力が戦後日本資本主義の基盤「零細土地所有＝零細農耕」にあたり、それが反応物質・触媒となって、異常なまでの化学反応＝爆発＝経済成長を引き起こしたとする。日本の稲作農業は「苦汗」・「稠密」・「協同／協調」という労働力の質と耕作面積の零細性という特性がある。日本の「高度成長」＝「強蓄積」にとって欠かせない稠密・精確・協調・苦汗労働力はこの「零細土地所有＝零細農耕」から供給された。さらに1946年3月「財産税法」により免税額10万円で税率は累進で最高税率は1500万円で90%となり、これにより大土地所有に集中してきた都市の土地が一挙に多人数小面積所有になった。経済成長とともに農村から都市へと出てきた労働者は、土地付き一戸建て住宅(マイホーム)願望を掻き立てられた。

高度成長による太平洋ベルト地帯への資本・企業と労働者の集中・集積は地価・地価高騰の強い誘因となった。地価高騰・投機が可能になったのは土地の零細性による。不動産に動産並みの流動性が生まれ、地価投機は1951年から90年までおよそ40年間継続し、「土地神話」が生まれ、キャピタルゲインは発生し続け、含み益経営が編み出され、資本・企業は土地を担保・原資に間接・系列金融によって資本を生み出した。さらに土地は投機の対象になり、投機利益をも生み出した。それは土地には制限原理を持たない「絶対的私的所有権」が認められ、農地改革によって細分化された零細農地と、財産税法による都市の零細宅地が土地の切り売り可能にしたからである。日本の製造業労働者数は1950年から1970年の20年間で576万人増加する。農漁民数は694万人減少する。戦後日本資本主義は農村における零細土地所有＝零細農耕、そこで陶冶された労働力という基盤がなければ存立しえなかった。

高度成長が生み出した膨大な供給力は国内の消費では賄えず、外需は必然となり、輸出は強制的となった。こうして戦後日本資本主義の基本構成(外生循環構造)が成立した。その基盤は零細土地所有＝零細農耕であり、その核心は稲作労働で陶冶された労働力であり、これが枯渇し、農業の衰退＝農村の崩壊がはっきりした時、「産業の空洞化」、日本資本主義の「失われた20年」が始まった。

第9章ではコピー生産としての急速なアジアの工業化として、なぜ先進工業国とはいえない中国においていともたやすく工業製品生産が可能になったのか。中国では製造工程の労働者は「両手両足ながら作業」に耐える労働者を採用し、一日の教育を受けたあと3日

間のライン(組み立て工程)研修を受けて製造ラインに入る。製造ラインはセル生産方式で、製造現場は基幹機能部品の半導体基板と射出成型されたプラスチック部品とプレス加工された金属部品などの手による組み立てなどである。ここでは熟練は不要である。生産は無人・自動生産である。コンピュータシミュレーションで設定がされれば、あとはコピー生産となり、未熟練労働さえ不要である。このことが可能になったのは、労働対象がマクロ物体から物体自体を構成する原子・電子・分子等マイクロ構造の操作可能性を生み出したことによる。ここから化学繊維・ゴム・工業用プラスチックなどの新素材が開発・実用化されている。半導体がそのよい実例である。半導体は製造工程でシリコンを純粋な物質、単結晶にする必要がある。これを製造するにはある結晶個体において、任意に設定した結晶軸座標系に固体中の原子配置を統一的にコントロール・記載しなければならない。1970年代後半以降、こうした原子配列の制御が可能となり、化学と物理学が融合したナノテクノロジーが新素材の開発・実用化を促進した。これらの新素材はすべて自然界には存在しないもので、旧来の諸資源・原料を使って、原子・電子・分子等をマイクロ構造的に設計・操作することによって創造される。こうした新素材の中でレアメタルとプラスチックが重要になってきている。ガリウム、ニオブ、コルタン、ガドリニウムなどがレアメタルとして注目され、プラスチックは現在高分子系素材として「エンジニアリング・プラスチック」と呼称され金属材料に代わる新素材になっている。この新素材は熱可塑性を持つため「射出成型」によって家電製品、自動車部品など様々な部品に加工されている。

この新素材に働きかけるために労働手段にも革命が必要となる。開発された新素材を加工するための新たな装置が開発実用化されていく。この新たな装置はこれまでの機械とはコンセプトを異にする。本来の機械が働きかける労働対象は、機械に代わる新しい労働手段・「科学的加工装置」によって別工程で生産されている。それは複雑な形状のエンジニアリング・プラスチック材のモジュール部品、あるいは基幹部品の感光体・レーザーユニットなどのプリント配線実装基板などである。

現段階のマイクロ・エレクトロニクス革命を歴史的に位置づけると、A・スミスの道具を使用する共同労働・一般的労働で生産力発展の鍵は「分業」からマルクスの原動機、作業機、伝導機構からなる機械体系、さらに第4の要素としてのオートメーションの後に展開する新たな段階とみることができる。それは従来のマクロの労働対

象でなくマイクロ物体の加工であり、生産過程で重要な役割を担うのは労働手段である科学的加工装置であり、それを操作するコンピュータソフトであり、それを作成するソフト労働である。現在の情報革命を担う中心はインターネットである。インターネットの開発者たちは仕様を公開し、誰一人として権利を主張しなかった。なぜならこれらの人々は、多くの関係者が新しい提案をインターネット上に公開し、問題点や解決策等を議論し、相互に批判・検討しあうことが、ソフトやネットワークの拡大・発展には必要不可欠であると認識していたからである。インターネットの生成史から言えることはインターネットが自律的で平等で自由な諸個人によって、公開の場で議論され生成され発展してきたということである。

この原理は機械制大工業の編成原理の中に包摂しきれないもの＝情報が登場し、それが生産・社会の決定的な要素になってきたことを意味する。

以上本書の紹介をしてきたが、冷戦体制の成立から崩壊、ポスト冷戦の世界体制をこれだけコンパクトにまとめた力量に敬服します。特に優れていると思われるのは各所に用いられている統計、図表の詳細な紹介です。これだけの図表を作成するだけでも大変な作業であると感服しています。以下若干の問題指摘をしたいと思います。

第一はポスト冷戦期におけるアメリカの評価についてである。アメリカ製造業は空洞化し、外部資源を活用する仮想企業体として生き残る道を模索する。その中で湾岸戦争、イラク戦争など一国覇権主義による世界軍事＝石油支配を推し進めていく。そして最後は金融略奪戦略を行い世界金融恐慌によって破綻する。このことは冷戦体制の崩壊はソ連の崩壊のみならず、アメリカ体制の落日をも意味してはいただろうか。涌井氏は、世界ケインズ政策の破綻、軍事インフレ蓄積機能の機能不全としているが事態はもっと深刻であると思われる。世界資本主義体制としてのアメリカ体制の崩壊の後にいかなる体制が到来するのかの展望がないという事態が、まさに現在とすれば、将来社会の新しい目がどこにあるのか、インターネットが作り出す社会がどんな社会なのかを我々は真剣に考える時代になっていると言えよう。

第二には日本とアジアの経済発展が将来どのようになるのかについてどう考えるのかである。日本、韓国に続いて中国の急成長が世界の工場として持続することは、地球環境の問題から考えても不可能なのではないだろうか。環境と調和しながら持続する発展をするためにはどうすればよいのか、涌井氏のこの著書はこの意味でも大きな問題提起を我々に提出していると思います。